宮崎学園短期大学紀要　Vol.9（2016）165-179 抜刷

「子どもの心身の発達を促進する絵本の調べ学習と情報交換による学習の過程」
――絵本ミニ・ビブリオバトル実践の教育心理学的視点――

渡邉　尚孝

College Student’s Learning Process through Picture Books for Children’s Development: Practical perspective of educational psychology on “Mini-Bibliobattle”

Naotaka WATANABE

要旨

本研究は、保育者養成短期大学保育科の授業で実施した「絵本ミニ・ビブリオバトル」に関するアンケート調査を行い、子どもの心身の発達を促進する絵本の調べ学習と情報交換による学習の過程について、アクティブ･ラーニングの視点から検証したものである。その結果、学友同士の対話的コミュニケーションは、絵本解釈の多角的な視点を得ることに繋がり、同時に聴き手の立場で考える姿勢を醸成することが確認され、絵本ミニ・ビブリオバトルがアクティブ・ラーニングの一手段として有効であることが示唆された。

（キーワード）ビブリオバトル、アクティブ・ラーニング、学習の過程、

I.　はじめに

絵本は学生への“リテラシー教材としての可能性”を含んでいる（山元 , 2008）。また、国立青少年教育振興機構による 2012 年 3 月の調査では、『読書活動の中でも特に幼児期や小学校低学年期に「家族から昔話を聞いたこと」「本や絵本の読み聞かせをしてもらったこと」「絵本を読んだこと」が多かった中学生や高校生ほど､意識･能力（「未来志向」「社会性」「自己肯定」「文化的作法･教養」「論理的思考」等）が高い。』と報告された。

幼児教育においては、文部科学省幼稚園教育要領解説（2013, 149 項）に「絵本や物語の世界に浸る体験が必要なのである。」と記載されている。これは「読み聞かせ」場面を想定しており、想像力を養うことや周囲の人たちとの関係を築くことは明確に意識されていない（久保田 , 2012）。その一方、近年は児童文学や美術論等からのアプローチのみにとどまらず、地域社会を結びつけるメディアとして、他の領域からの学際的アプローチが急増しているのである。1996 年には絵本学会が設立され、研究紀要「絵本学」や機関誌「絵本 BOOKEND」が発行され、2012 年には国立青少年教育振興機構による絵本専門士養成講座が開講された。また、子どもの本の専門店「クレヨンハウス」を運営するジャーナリストの落合

(2013) は『絵本は、年齢制限のない、深くて豊かなメディアである。』と述べ、大人向けの「絵本処方箋」(朝日文庫）を著しており、幅広い絵本研究が加速している（渡邉 , 2016)。

また、毎日新聞の「第 69 回読書世論調査（2015)」によると、子どもに本を読む習慣を身に付けさせるための環境として「学校よりも家庭」を重視する人が多くなったという。家庭での読書経験が重視される中、幼児教育を担う保育者から保護者への情報提供は貴重なものである。業務の中で子どもに読み聞かせをするだけでなく、家庭における読書環境を促進する手段として、保育者からの「幼児・児童の心身の発達を促す絵本」に関する情報提供の意義は大きいと言える。

本稿では、「相談援助（演習)」授業内における「絵本ミニ・ビブリオバトル」を通じた学生たちの学習の過程について報告し、協働学習における＜ジャンプの課題＞（佐藤 , 2012）という視点との関連を中心に、紹介スピーチにおける「聞き手を意識すること」(内藤 2013、菅原・虫明 2014）についても考察する。子どもの心身の発達を促す絵本に関する保育科学生の調べ学習と「絵本ミニ・ビブリオバトル」の実践研究は、アクティブ・ラーニングの一手段として教育心理学的意義を高める一助となろう。

II.　アクティブ・ラーニングとビブリオバトル

2015 年 11 月、文部科学省中央教育審議会の「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」(諮問）では、学習指導要領等の改善に関し、「新しい教育の取組」に共通する視点を以下のように述べ、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆるアクティブ・ラーニング)」充実の必要性について触れている。

> ある事柄に関する知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、子供たちがそうした教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要であるという視点です。そのために必要な力を子供たちに育むためには、「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があります。

加えて同省中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換にむけて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申)」における用語集では、アクティブ・ラーニングを次のように定義している。

> 教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

これらの学習指導要領改善や大学教育改革の進行の中で、2007年にビブリオバトルが登場した。ビブリオバトルは、参加者それぞれが自分の好きな本についてレジュメを使用せずに制限時間（公式5分）内で書評スピーチを行い、参加者を含めた聴衆が一番読みたくなった本に投票して“チャンプ本”を多数決で決める。紹介された内容だけでなく紹介者の人柄がわかるため、「人を通して本を知る、本を通して人を知る。」というキャッチコピーで親しまれるコミュニケーションゲームである。発案者の谷口（2014）によると、ビブリオバトルには(1)参加者が本の内容を共有できる（書籍情報共有機能)、(2)スピーチの訓練になる（スピーチ能力向上機能)、(3)いい本がみつかる（良書探索機能)、(4)お互いの理解が深まる（コミュニティ開発機能)、以上4つの機能があるという。2011年3月には公共図書館へ波及し全国へ広がり、全国185大学以上、111館以上の公共図書館で開催され、2012年にlibrary of the Year 2012を受賞(広瀬,2014)。今や小学生から大人までが楽しむゲームとなった(渡邉,2016)。当初は図書館学や情報リテラシー教育の中で各種の実践報告がなされてきたが、次第に書店やカフェあるいは児童館などの実践報告も増えている。ビブリオバトルは情報共有という単一目的のみならずプレゼンテーション能力の向上や参加者の個性の理解といった重層的な機能を持った「場」づくりを狙い設計されており（谷口・川上・片井,2010)、さまざまな視点からの研究可能性を含んでいるのである。

安藤（2015）は司書教諭資格科目の中で、読書推進を目的としたアクティブ・ラーニングの一手法としてビブリオバトルを位置づけ、教育心理学・教育学の知見を踏まえて考察している。『聴衆とバトラーとの間の対話が重要であり、学生同士が相互に啓発されてこそ、ビブリオバトルは真正のアクティブ・ラーニングになる可能性を持つ。』とし、授業などのフォーマルなコミュニケーションの場にとどまらず、インフォーマルな場での学生同士の意思疎通活性化の触媒となる可能性について触れ、「学生コミュニティの相互交流開発機能」を見出している。また、小野（2014）が『そのゲーム性を活かして教育効果を高めるためには、教員がルールの趣旨を深く理解した上で、教育課程のどの文脈に位置づけるのか、十分に検討する必要がある。』と述べていることから、授業内での実践について広範な研究が望まれる所である。

III.　本研究の目的と先行研究

筆者は「相談援助（演習)」や「保育相談支援（演習)」の授業において、「保護者に絵本を紹介する」という前提で、授業外学修における調べ学習を促し、アクティブ・ラーニングの一手段として「絵本ミニ・ビブリオバトル」を活用した情報交換の場を保育科学生に提供してきた。保育士の絵本の活用可能性を高めること、及び相談対象者の立場や感情を意識した情報発信による援助（支援）技術を育成することを授業目標としたものであるが、概ね以下のポイントに関する先行研究を基に実践研究を行ったので先に記しておく。

(1) アクティブ・ラーニングにおける「ジャンプの課題」

佐藤（2012）はアクティブ・ラーニングをはじめとした協働的活動が有効に機能するための条件として、対話的コミュニケーションを重視しており、『「他者の声を聴くこと」は学びの出発点であり、対話的コミュニケーションで構成される民主主義の基礎である。』と述べた。小グループによる協働的学びにおいては、学力の低い子どもにとっての利益だけでなく、学力の高い子どもにもより高

い学力を保障することが重要であり、そのための条件として、＜ジャンプの課題＞と呼ぶより高いレベルの課題への挑戦を含むことを重視したのである。

学校という「学びの共同体」（佐藤，2012）における協働的活動の中では、誰もが理解すべき＜共有の課題＞（教科書レベル）と、その理解を基礎に挑戦する＜ジャンプの課題＞（教科書レベル以上）の２つの課題で授業デザインがなされる。＜共有の課題＞で最も利益を得ているのは高学力の子どもたちで、逆に＜ジャンプの課題＞でもっとも利益を得ているのは低学力の子どもたちである。つまり、『低学力の子どもは、協働的学びの中で＜発展＞から＜基礎＞に降りる学びを遂行している。』という。低学力の子どもほど教師のくどい説明を嫌い、挑戦する学びを好む。同時に、学びのプロセスには「理解＞応用」の一方向だけでなく「応用＞理解」というプロセスも重要な働きをしているという主張である。

安藤（2015）が述べたとおり、授業におけるビブリオバトルは、アクティブ・ラーニングの一つの形と思われる。そして同時に、佐藤（2012）の視座を用いると、聴衆を保護者と想定した「絵本ミニ・ビブリオバトル」の課題は大いなる＜ジャンプの課題＞であり、学生の学習の過程を最大限促進することのできる「学びの共同体」を構築する手段となる可能性を含んでいる。

(2) ビブリオバトルにおける「聴き手への意識」

次に、ビブリオバトルでは「聴衆が一番読みたいと思った本に投票してチャンプ本が決定される」という競争原理を含んでいるため、「聴き手を意識すること」に関する先行研究（内藤 2013、菅原・虫明 2014）にも触れておく。菅原・虫明（2014）は、ビブリオバトルのスピーチ内容を分析し、『話し手が聴き手に直接質問したり、同意をもとめたり、本を勧め（薦め）たりする言語表現を用いる事によって、聴き手に働きかけることが特徴である』と主張した。また一方、内藤（2013）の研究によると、ビブリオバトルの発表者としてスピーチを準備する段階では、その内容に注意を向ける者が多かったのに対して、聴き手として評価する場合には、スピーチ内容よりも方法に重点を置く者が多かったという。指導においては、『プレゼン方法のスキルが十分身についてから内容面の気づきを促していくのではなく、初期段階から両者をらせん状に伸ばしていく方が望ましい。』と主張した。この点は佐藤（2012）が触れた「理解＞応用」と「応用＞理解」を行きつ戻りつするプロセスの重要性と同様である。

以上のようなアクティブ・ラーニングにおける＜ジャンプの課題＞とビブリオバトルにおける「聴き手への意識」の高まりを念頭におきつつ、「絵本ミニ・ビブリオバトル」の実践研究を次に述べる方法で行った。聴衆を保護者と想定した絵本紹介スピーチを通じて発信力を高め、同時に、紹介された絵本を読む動機付けを高めたり、聴き手の立場で考える姿勢を育成したりすることを授業の目標とした。さらに実践後のアンケートを分析することにより、学習の過程や効果及び先行研究との関連を明らかにすることが本研究の目的である。

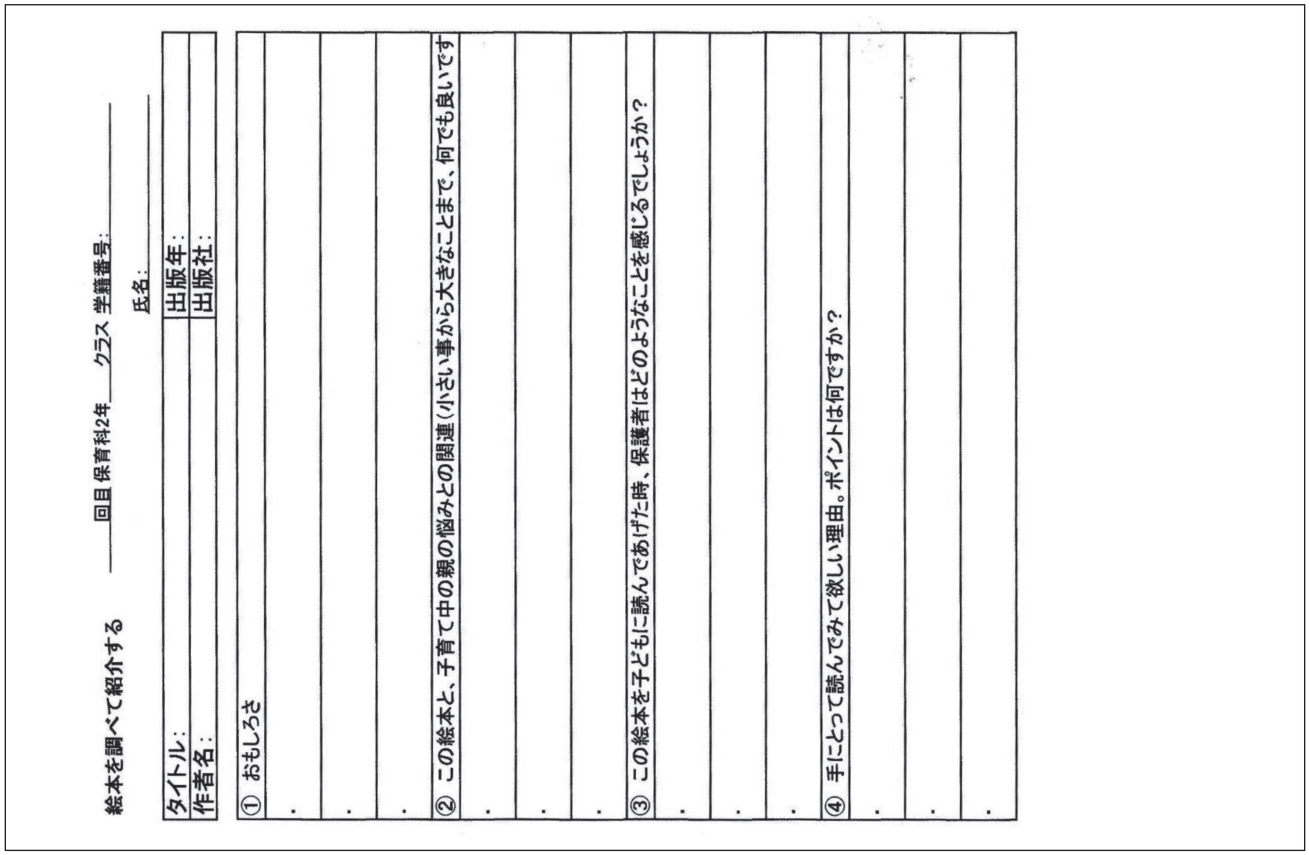
Ⅳ.　研究方法

(1) 事前の調べ学習シート

今回の実践において、学生が事前に行う調べ学習活動は、岩手医科大学の全学部学生を対象とした初年次教育プログラム「アカデミック・リテラシー」に関する報告（廣瀬，藤澤，鈴木，芳賀，渡辺，千葉，舘野，平林，2014；廣瀬，藤澤，關山，芳賀，渡辺，千葉，鈴木，相澤，平林，2015；相澤，藤澤，平林，2015）を参考に組み立てたため、その概要について紹介しておく。岩手医科大学の新設科目「アカデミック・リテラシー」は、大学での学びについて自覚させ、他者の表現の正しい理解と自分の考えのわかりやすい伝達の技術をさまざまな角度から指導する科目として、専門的な学習に向けての基礎力を養うことを目的としたものである（廣瀬ら，2015）。中心的なコンテンツとしてビブリオバトルを導入しており、事前準備のためにポイントを要約するシートや発表のためのメモ用紙等を配付し、学生が当日まで何の準備もなしに臨むことを避ける工夫がなされている。2014 年度は全 14 回中 4 回（6 時間）。2015 年度はこれをより充実させるため、講義枠を前年度の 4 回から 8 回に拡大した。平成 24 年文部科学省中央教育審議会答申「新たな大学教育の質的転換に向けて」にあるアクティブ・ラーニング導入促進の流れを受けての取組である。この中で、学生のビブリオバトル準備の変化についても調査しており、2014 年から 2015 年にかけて講義枠を拡大した効果を分析している。また、紹介する本の分野を限定するなど内容密度を高くすることが、学生のモチベーションや満足度を上げるための課題であるとしている。

相澤ら（2015）は、ビブリオバトルへの参加と、初年次学生の学習スキルの自己評価に関する事前・事後アンケートの項目を分析した。この中で、『ビブリオバトルへの十分な準備と積極的参加という態度が、学生の学習スキルの自己評価と関わり、ビブリオバトルに参加した学生は、事後アンケートにおいて「意見の主張、多角的な見方」に関するスキルの自己評価が高いことが認められた。』と述べている。これら岩手医科大学グループの研究は、学生のアカデミック・リテラシー教育とアクティブ・ラーニングの一つの型を提供しており、ビブリオバトルを導入した教育効果の検討としては詳細で貴重なものである。

筆者の授業における「絵本ミニ・ビブリオバトル」では、主に岩手医科大学の報告を参考に授業外学修課題のための事前準備ワークシートを作成配布した。後に述べる絵本内容分析シート（図 1）と、紹介プレゼンテーションのポイントまとめシート（図 2）の 2 種類である。どの絵本をどのように紹介するか、絵本の選び方＜共有の課題＞から紹介の手法＜ジャンプの課題＞（佐藤，2012）までを、ワークシートへの書き込みを経て、「絵本ミニ･ビブリオバトル」当日を迎えることになる。ワークシートへの記入内容については、当日までの授業内で課題理解の確認チェックを行う程度にとどめた。谷口（2015）が『原稿という「書き言葉」への変換が、ビブリオバトルという「話し言葉」での実時間的コミュニケーションをねじ曲げてしまい、ビブリオバトルが本来持っているゲームとしての面白さを毀損してしまう。』と述べていることを考慮して、発表原稿準備のための原稿シート（コンテンツシート）は配布していない。事前の原稿準備により、学生が教員の期待する文章を書き添削を求めたり、当日の棒読みに近いプレゼンテーションとなったりするのを避けるためである。



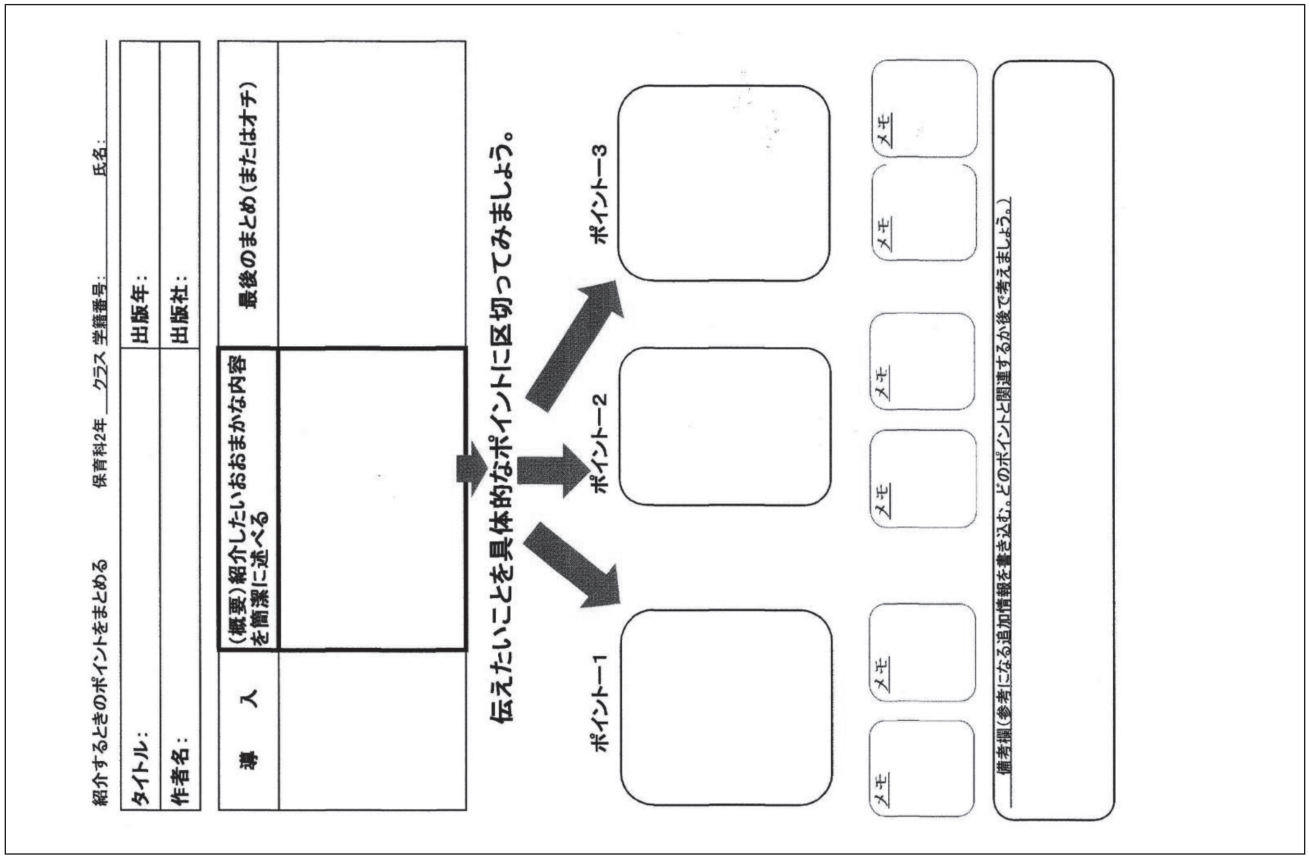
絵本を調べて紹介する　　回目 保育科2年　クラス 坐籍番号:

氏名:

タイトル:	出版年:
作者名:	出版社:

① おもしろさ
.
.
.
② この絵本と、子育て中の親の悩みとの関連（小さい事から大きなことまで、何でも良いです
.
.
.
③ この絵本を子どもに読んであげた時、保護者はどのようなことを感じるでしょうか？
.
.
.
④ 手にとって読んでみて欲しい理由。ポイントは何ですか？
.
.
.

図 1. 絵本内容分析シート



紹介するときのポイントをまとめる　　保育科2年　クラス 坐籍番号:　　氏名:

タイトル:	出版年:
作者名:	出版社:

導　入	（概要）紹介したいおおまかな内容を簡潔に述べる

最後のまとめ（またはオチ）

伝えたいことを具体的なポイントに区切ってみましょう。

ポイント―1

ポイント―2

ポイント―3

メモ　メモ　メモ　メモ　メモ　メモ

備考欄（参考になる追加情報を書き込む。どのポイントと関連するか後で考えましょう。）

図 2. ポイントまとめシート

(2) 設定条件の根拠と予測

一般的なビブリオバトルの公式ルールと授業内実施上の修正補足事項をスライドと配布資料にて説明を行った（図 3)。絵本紹介スピーチの時間は､赤池･谷口（2014）の研究を参考に短めの 3 分間、その後のディスカッション時間を 2 分間とした。これを決選バトルの時間ルールとし、「絵本ミニ・ビブリオバトル」という名称で、後日、ビブリオバトル普及委員会の承諾（注）を得ている。また、小グループごとの予選ではスピーチ 2 分間、ディスカッション 1 分間として、人前でのスピーチに臆する学生たちにとってのハードルを低くする工夫を行ない、web 上のサンプル動画を鑑賞させてイメージを持たせたり、当日は登壇時の BGM を活用したりするなど、学生が楽しめる要素を盛り込んで実施した（図 4,5, 参照)。

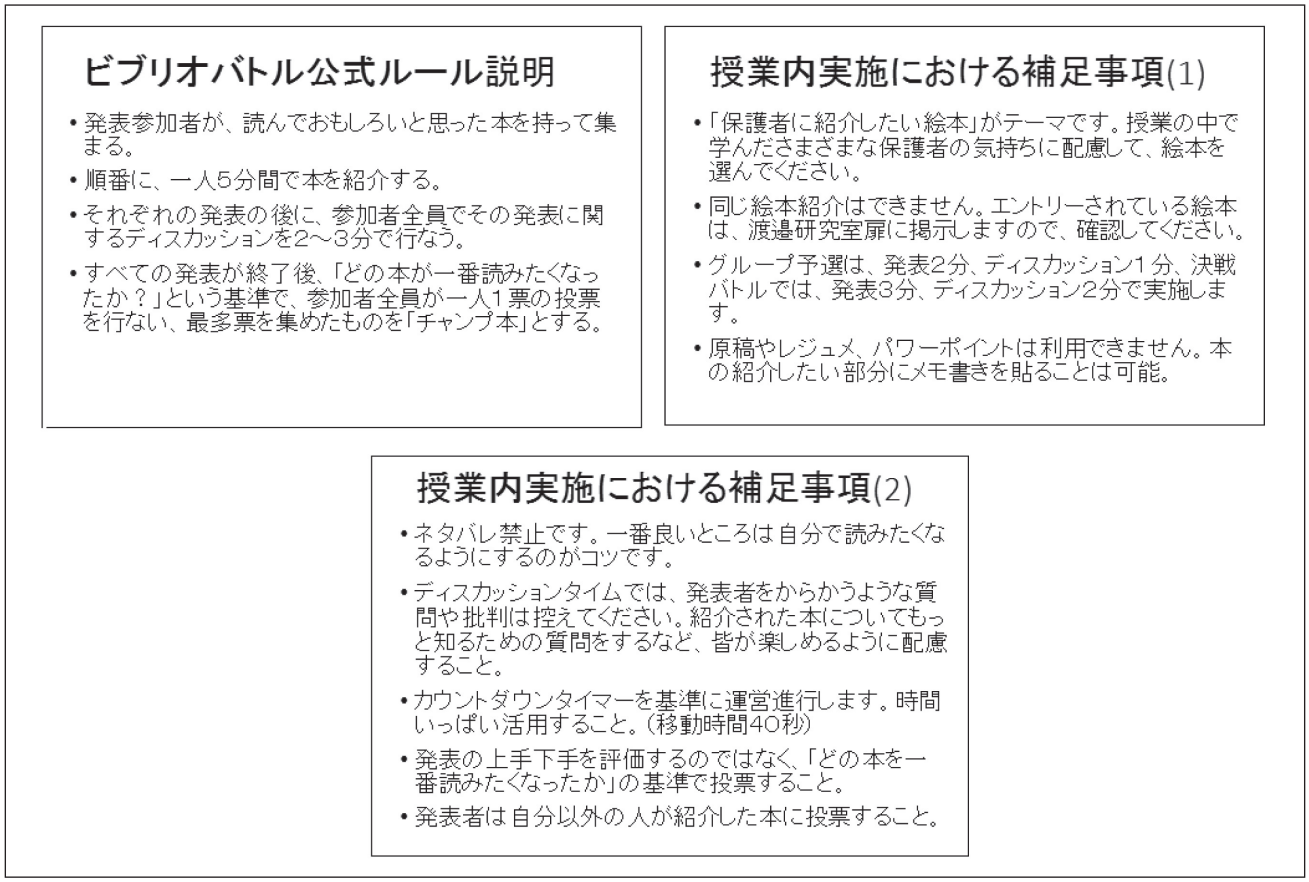


図 3. 公式ルールと授業内実施上の修正補足事項説明

紹介する絵本選定においては、「子育て中の保護者に紹介したい絵本を選ぶこと」とし、「聴衆は保護者の立場になって聴くこと」という条件を付けた。これは「相談援助（演習)」授業内で実施するため、「保護者への情報提供による援助」というロールプレイの枠組みを設けたためである。また同時に、学生の発信スキルを高めること、紹介された絵本を読む動機付けを高めること、そして、菅原・虫明（2014）や内藤（2013）らの先行研究を踏まえ、聴き手の立場で考える姿勢を育成すること等を授業の目標とした。

単に自分の好きな絵本を学友に紹介するものではなく、「子育て中の保護者に紹介したい絵本」という課題は、学力の低い学生にとっては高いハードルであるが、将来の仕事に繋がり、かつ学力の高い学生の活動実践から自らの課題に対する深い洞察を得ることが期待される。この点は、佐藤（2012）の＜ジャンプの課題＞に相通じると考える。

図 4. 小グループによる予選の様子

図 5. クラス内決選バトルの様子

(3) 調査内容・対象者と時期

事前の調べ学習と「絵本ミニ・ビブリオバトル」実践による情報交換プロセスが学生に与えた影響についてアンケート調査を実施した（図 6）。内容は、事前に調べた絵本の数、スピーチ準備における聴衆（聴き手）への意識、ディスカッションへの積極性、保護者の立場や気持ちへの意識の高まり等について 4 拓で自己評価を尋ねた。また、アンケート用紙裏面への自由記述による感想について大まかな分類を行った。

対象者は短期大学保育科 2 年生全クラス。2016 年 7 月中旬から下旬にかけ、1 クラスごとの「相談援助（演習）」授業の中で実施した。総参加者 195 名のうち、絵本ミニ・ビブリオバトルへのエントリーは 116 名、参加のみ学生は 79 名で、アンケート回収はエントリー学生から 109 名、参加のみ学生から 61 名、合計 170 名（回収率 87%）であった。

絵本ミニビブリオバトルについて　　クラス　　学籍番号　　氏名

（1番～4番はエントリー者のみお答えください。5番6番は全員にお尋ねします。また、回答は成績に全く関係ありません。）

1. あなたは紹介する絵本を選ぶために、何冊くらい検討しましたか？

1冊　　4冊以上

1　　2　　3　　4

2. 保護者に絵本を紹介するあなたの目的は明確に意識できましたか？

全く考えなかった。　　かなり意識した。

1　　2　　3　　4

3. 絵本紹介スピーチを準備するとき、聴衆（聞き手）の立場や気持ちをどのくらい考えましたか？

全く考えなかった。　　かなり考えた。

1　　2　　3　　4

4. 絵本紹介スピーチ内容を準備するために、誰かに相談をしましたか？

全くしなかった。　　かなり相談した。

1　　2　　3　　4

5. 絵本紹介後のディスカッションでは、発表者の考えに興味を持って質問することができましたか？

全く質問しなかった。　　かなり質問できた。

1　　2　　3　　4

6. 紹介スピーチを聴きながら、保護者の立場や気持ちをどのくらい感じ（考え）ましたか？

全く感じ（考え）なかった。　　かなり感じ（考え）た。

1　　2　　3　　4

（渡邉研究室の扉の袋に提出してください。）

図 6. アンケート様式

V.　結果と考察

学生たちは、子どもの心身の発達を促す絵本や、子育てに疲れた保護者自身の癒しに関連する独自の洞察を基にした多様な絵本の紹介スピーチを行い、ディスカッションも活発に行われた。絵本ミニ・ビブリオバトルにエントリーした学生（109 名）のアンケートを統計処理した主な解析結果（スピアマンの順位相関行列（表 1）及び相関係数検定（表 2））は以下の通りである。各質問項目は便宜上シンプルな表現に修正した。なお、項目ごとの度数分布は参考資料として巻末に添付した。

① 項目 2.「紹介する目的意識」と項目 3.「発表準備段階での聴き手の立場への意識」は正の相関（有意）$r=0.44$, $p < 0.01$

② 項目 2.「紹介する目的意識」と項目 5.「ディスカッションへの積極的参加」は正の相関（有意）$r=0.26$, $p < 0.01$

③ 項目 3.「発表準備段階で聴き手の立場への意識」と項目 5.「ディスカッションへの積極的参加」は正の相関（有意）$r=0.33$, $p < 0.01$

④ 項目 3.「発表準備段階で聴き手の立場への意識」と項目 6.「聴衆として保護者の立場への意識の高さ」は正の相関（有意）$r=0.29$, $p < 0.01$

「保護者へ絵本を紹介する目的意識」の高かった学生は、発表準備段階で聴き手の立場を強く意識し、積極的にディスカッション参加したと考えられる。さらに、「発表準備段階で聴き手の立場への意識」が高かった学生は、積極的に保護者役のロールプレイを行い、ディスカッション参加したものと考えられる。

自由記述された感想を、エントリー学生（表 3）と非エントリー（参加のみ）学生（表 4）に分けて大まかに分類した。エントリー学生、参加のみ学生それぞれに、「友達の紹介方法が参考になった」等の感想が 20% 以上、「解釈の多様性に関する気付き」も 10% 前後含まれている。また、エントリー学生においては「保護者の立場に立って考え伝えること」についての課題意識に関する記述が 25% あった。学友のプレゼンテーションを聴き、同じ考えに共感したり、異なる解釈に驚いたり、紹介された絵本を調べたくなったり、発表スキルに感心したりするなど、佐藤（2012）の主張した＜ジャンプの課題＞に刺激を受けた学生が多く、内藤（2013）の研究成果とも関連する結果が得られた。

相澤ら（2015）は、ビブリオバトルへの積極的参加と学習スキル自己評価、そして事後アンケートにおける「意見の主張、多角的な見方」に関する自己評価との関連について触れた。加えて、平（2012）は『同じ本であっても、それに対するお互いの印象が時として同じであり、また時として全く異なることを疑似体験する。』という特徴も効果の一つだと主張した。さらに、村田（2002）は認知心理学の立場から、読書の「能動的で複雑な情報処理」について『読み手は場合によって読み方を変え、「行間」を読み説いてさらに深い解釈を作り上げる。』と述べている。これらの多角的な見方を、学友同士の対話的コミュニケーションの中で学ぶことは、アクティブ・ラーニングで得られる利益の一つであり、絵本ミニ・ビブリオバトルはその一手段として有効であると考えられる。

以上、今回の実践研究について、アンケート項目の相関関係と感想の分類から考察した。絵本ミニ・ビブリオバトルの実践においては、その準備も含めた学習の過程において、「多角的な解釈への気づき」が得られ「紹介された絵本を読みたい」という動機づけが高まること、競争原理あるいは設定された条件によっては聴き手の立場への意識が高まること、「友達の紹介方法が参考になった」などスピーチスキルへの関心を高めることなどが効果として考えられる。

Ⅵ.　まとめ

絵本ミニ・ビブリオバトル活動の中で、学生は、子どもの心身の発達を促す絵本や、子育てに疲れた保護者自身の癒しに関連する独自の洞察を基にした多様な絵本紹介スピーチを行っている。実践後は、他の学友から紹介された絵本を読みたくなったという感想が多く、学生同士が相互に啓発されていた。さらに、スピーチを実践した学生も聴衆参加のみの学生も、多様な解釈の在りようへの気付きを得ており、先行研究と関連する結果が得られた。ビブリオバトルによる『重層的な機能を持った「場」づくり』（谷口 ,2010）は、アクティブ・ラーニングとしての有用性を示唆するものであり、参加者にどのような影響を与えるかについて今後の研究可能性を多く含んでいるといえよう。本研究は個人が担当する授業枠内での実践を基にしており、公式ルールに則ったものではないため、今後はできるだけ公式ルールによる学習過程を実施分析し、その意義や効果について研究を深めて行きたい。

（表 1）スピアマンの順位相関行列

スピアマンの順位相関行列	1. 事前検討した絵本の冊数	2. 紹介する目的意識	3. 発表準備段階での、聴き手の立場への意識の高さ	4. 相談相手の数	5. ディスカッションへの積極的参加	6. 聴き手として、保護者の立場への意識の高さ
1. 事前検討した絵本の冊数	1	0.18	0.15	0.14	0.1	0.1
2. 紹介する目的意識	0.18	1	0.44	-0.12	0.26	0.21
3. 発表準備段階での、聴き手の立場への意識の高さ	0.15	0.44	1	0.17	0.33	0.29
4. 相談相手の数	0.14	-0.12	0.17	1	0.21	0.19
5. ディスカッションへの積極的参加	0.1	0.26	0.33	0.21	1	0.25
6. 聴き手として、保護者の立場への意識の高さ	0.1	0.21	0.29	0.19	0.25	1

（表 2）順位相関係数の検定

順位相関係数の検定　［上三角：P 値/下三角：*, P<0.05 **, P<0.01］	1. 事前検討した絵本の冊数	2. 紹介する目的意識	3. 発表準備段階での、聴き手の立場への意識の高さ	4. 相談相手の数	5. ディスカッションへの積極的参加	6. 聴き手として、保護者の立場への意識の高さ
1. 事前検討した絵本の冊数	-	0.06	0.13	0.14	0.3	0.29
2. 紹介する目的意識		-	0	0.23	0.01	0.03
3. 発表準備段階での、聴き手の立場への意識の高さ		**	-	0.08	0	0
4. 相談相手の数				-	0.03	0.04
5. ディスカッションへの積極的参加		**	**	*	-	0.01
6. 聴き手として、保護者の立場への意識の高さ		*	**	*	**	-

（表 3）エントリー学生の感想

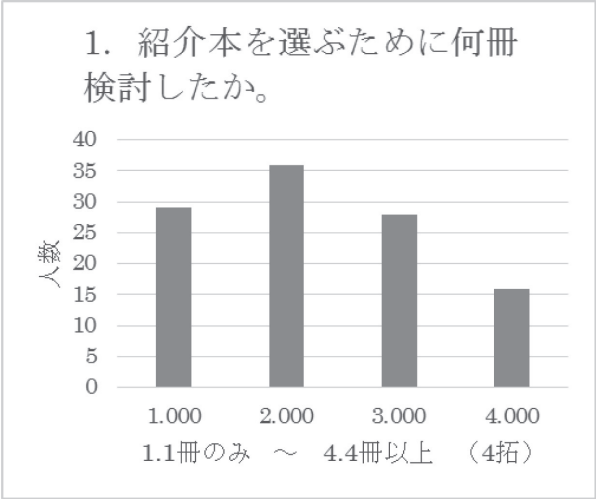
エントリー学生の感想を主旨別に分類（回収 109 名）	人数	%
相手の立場に立って考え伝えることの難しさや反省に関する記述	27	25%
解釈の多様性に関する気付き	11	10%
友達の紹介方法が参考になった。	22	20%
「楽しかった。またやりたい。」等ビブリオバトルへの興味	27	25%
もっと絵本を読みたい。	22	20%
合　　計	109	100%

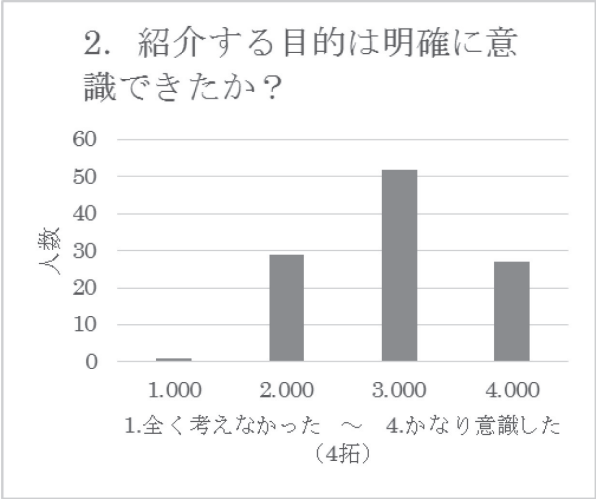
（表 4）非エントリー（参加のみ）学生の感想

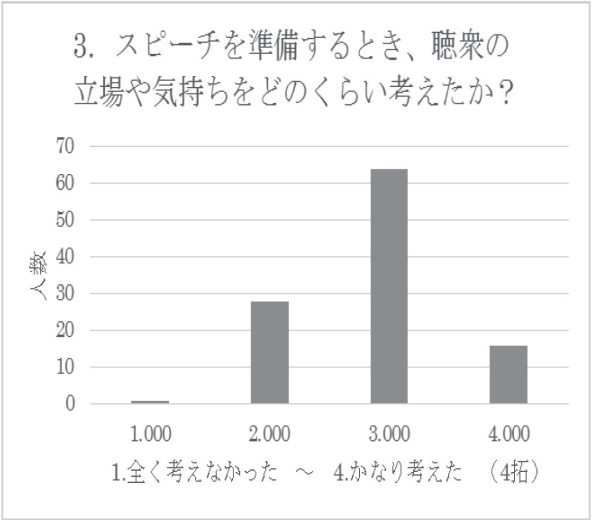
非エントリー学生の感想を主旨別に分類（回収 61 名）	人数	%
解釈の多様性に関する気付き	5	8%
友達の紹介方法が参考になった。	14	23%
もっと絵本を読みたいと思った。	12	20%
面白かった。	25	41%
次回はエントリーしたい。	3	5%
批判	2	3%
合　　計	61	100%

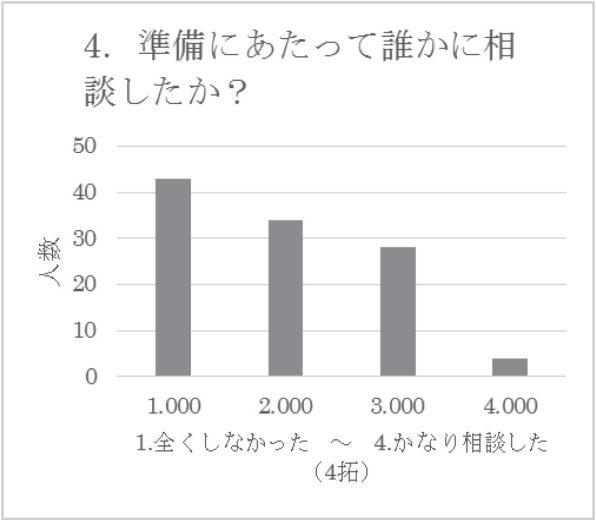
資料

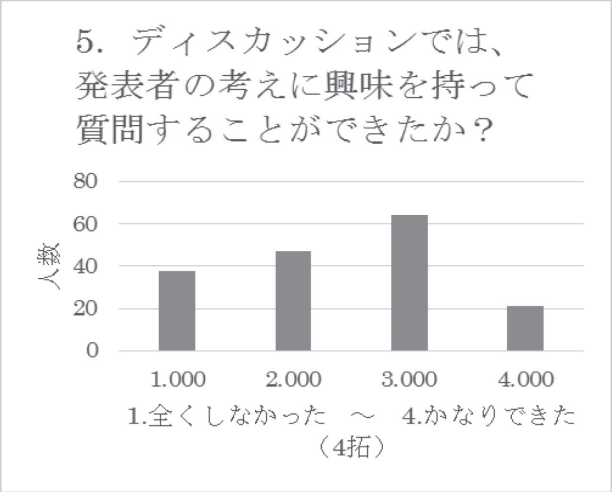
絵本ミニ・ビブリオバトル実施後アンケート項目度数分布（エントリー学生 109 名分）

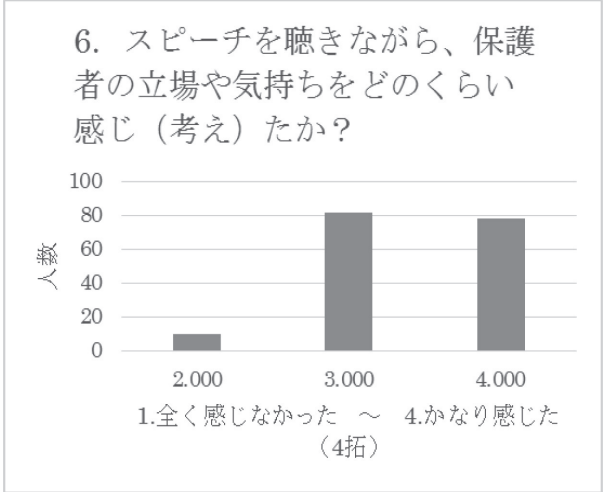












（注）

ビブリオバトルは商標登録されている。名称使用のガイドラインについては、ビブリオバトル公式ウェブサイトを参照。http://www.bibliobattle.jp/ming-cheng-li-yong（2018 年 1 月 7 日最終確認）

引用文献

安藤友張（2015）.「アクティブ・ラーニングとしてのビブリオバトルの可能性――司書教諭資格科目読書と豊かな人間性における教育実践――」，『九州国際大学教養研究』 第 22 巻　第 1 号

相澤文恵，藤澤美穂，平林香織（2015）.「アカデミック・リテラシーの教育効果の検討――アンケート調査結果からの考察――」，『岩手医科大学教養教育研究年報』 第 50 号（2015），　67-79

赤池勇磨，谷口忠大，（2014）.「ビブリオバトルにおける発表制限時間のデザイン」，『日本経営工学会論文誌』Vol.65　No.3　157-167.

小野永貴（2014）.「社会と情報　ビブリオバトルを題材とした情報発信活動の総合演習（第 18 回公開教育研究会報告「研究授業」)」、『御茶の水大学研究紀要』，　2016 年 7 月 16 日　お茶の水大学 web ライブラリ　(URL)

落合恵子（2010）.「絵本処方箋」　朝日文庫

久保田健一郎 (2012).　「絵本と子どもの人間形成論：他者との邂逅の不可能性と可能性」，『大阪大学教育学年報』 第 17 号　89-100

国立青少年教育振興機構（2014）.「絵本で子どもも大人も心を豊かに」～絵本専門士養成制度準備委員会報告書～，
http://www.niye.go.jp/services/plan/ehon/senmon.html（2017/1/10　最終確認）

佐藤学（2012）.『「学校を改革する」学びの共同体の構想と実践』 岩波ブックレット No.842　岩波書店 2012

菅原和夫，虫明美喜（2014）.「話す活動に位置づけた知的書評合戦ビブリオバトルにおけるスピーチの特徴――独話的スピーチから聞き手を意識したスピーチへ――，『日本語教育方法研究会誌』Vol.21　No.1

谷口忠大，川上浩司，片井修，（2010）.「ビブリオバトル：書評により媒介される社会的相互作用場の設計」，『ヒューマンインターフェイス学会論文誌』 Vol.12,　No.4,2010

谷口忠大（2015）「ビブリオバトルとは何か」，『学校図書館』通巻第 775 号，14-16

平正人（2012）.「「ビブリオバトル」と大学の授業：<< ビブリオバトル in 文教 >> の試み」in　特集：学生と本を繋ぐ試み，『大学の図書館』通巻 No.460,31 巻 3 号，

内藤真理子（2013）.「聞き手に寄り添うことを意識するための試み――ビブリオバトルを通して――」，『日本語教育方法研究会誌』Vol,20,No.1

廣瀬清英，藤澤美穂，鈴木晴香，芳賀真理子，渡辺敦子，千葉基弘，舘野雅之，平林香織（2014）.　「ビブリオバトル：アカデミック・リテラシーにおける図書館職員との協働」，『岩手医科大学教養教育研究年報』第 49 号，41-56

廣瀬清英，藤澤美穂，關山悦子，芳賀真理子，渡辺敦子，千葉基弘，鈴木晴香，相澤文恵，平林香織（2015）.「ビブリオバトル:アカデミック・リテラシーにおける図書館職員との協働－ 2015 年版－」，『岩手医科大学教養教育研究年報』第 50 号，81-99

毎日新聞（2015）.『読書教育の場は「家庭」』，2015 年 10 月 26 日（月）朝刊 13 面特集

村田夏子（2002）.「認知心理学と読書」，特集：読書とことばをめぐって，『図書館雑誌』2002.7. 464-465

文部科学省（2012）.「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」，中央教育審議会用語集、http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf　（2017/1/4 最終確認）

文部科学省（2015）.「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」. 中央教育審議会　26 文科初第 852 号 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm（2017/1/3　最終確認）

山元隆春（2008）.「リテラシー教材としての絵本の可能性　～ L.R.Sipe の論を手がかりとして～」，『全国大学国語教育学会発表要旨集』115　全国大学国語教育学会

文部科学省（2013）.『幼稚園教育要領解説』，初版第 8 刷，フレーベル館

渡邉尚孝（2016）.「コミュニケーション媒体としての絵本活用――絵本ビブリオバトルの試み――」，『宮崎学園短期大学教育研究』第 12 号，67-70

参考文献

芦田美香（2015）.「教室でビブリオバトルをやってみる」，『内外教育』，2015 年 1 月 6 日，p18

天川勝志（2013）.「保育科におけるキャリア教育としてのビブリオバトルの実践と学習効果に関する考察」 FD 紀要『聖徳の教え育む技法』第 8 号　49-64.

板垣香奈子，藤井絵里佳、（2014）.「書店インタビュー　お客様と本とをつなぐ“明異物”イベント：ビブリオバトルとライブトーク」，　特集　リアル書店だからできる「本を楽しむイベント」『日販通信』，16-21，日本出版販売　東京

勝亦あき子（2015）.「文化祭でビブリオバトル！――主体的な取り組みのための支援と学び――」，『学校図書館』通巻第 775 号，22-24. 特集 I「ビブリオバトル」

新村知子，鈴木正一，高瀬恵次，長野峻介（2015）.「ビブリオバトルを通してコミュニケーション能力と知的好奇心を養う」，『石川県立大学年報 ： 生産・環境・食品 ： バイオテクノロジーを基礎として 26, 84-90

高井亨（2014）.「ビブリオバトル in 鳥取実施報告」，『地域イノベーション研究』2014,32-40

谷口忠大（2013）.「ビブリオバトル～本を知り人を知る書評ゲーム～」, 文春新書
徳嵩博樹（2014）.「小学生による絵本のビブリオバトル」, 絵本学講座 4, 絵本ワークショップ.　110-115,　中川素子編　朝倉書店
中川素子（2015）.「絵本ビブリオ LOVE ～魅力を語る・表現する～」　朝倉書店
西田章子, 小早川太美子(2015).　「読書会「ビブリオバトル」でつながるチーム久原の輪」,『学校図書館』通巻第 775 号, 27-29, 特集 I「ビブリオバトル」,
ビブリオバトル普及委員会（2015）.「ビブリオバトル　ハンドブック」, 子どもの未来社,
前田由紀（2015）.「中学校・高等学校におけるビブリオバトル活用の提言」,『学校図書館』通巻第 775 号, 19-21, 特集 I「ビブリオバトル」
班目淑子（2015）. 本を語ることはおもしろい！　『学校図書館』通巻第 775 号, 31-32, 特集 I「ビブリオバトル」
三浦恵美子（2015）.　「知的書評合戦（ビブリオバトル）ができるまで」,『図書館評論』No.56 : Jul.2015,30-37, 図書館問題研究会編
村中李衣（2002）.「ものがたりの隙間へ誘われて――読書療法から読みあいへ――」,『図書館雑誌』2002.7.　456-458, 特集　読書と言葉をめぐって
吉野英知（2014）.「新しい本の楽しみ方「ビブリオバトル」の多方面への展開動向」,『カレントアウェアネス』No.321,14-17
渡邉尚孝（2016）.『保育科 2 年生の授業「相談援助」で､絵本「ミニ･ビブリオバトル」を試みました｡』宮崎学園短期大学 web2016 年 8 月 8 日新着情報
http://www.mwjc.ac.jp/sub_news/archives/275　(2017/1/6 最終確認)
渡辺博芳（2015）.「大学教育改革におけるアクティブ・ラーニングの位置づけ」,『帝京大学ラーニングテクノロジー開発室 Newsletter』, No.41.